

2022年2月13日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「わたしは命のパンである」

聖書：ヨハネによる福音書6：6：41～59

福音書が書かれた時代背景を少しさかのぼってみたい。ユダヤ・パレスチナ地域はローマ帝国支配下にあつて、ユダヤ人の抵抗運動は激しさを増し、66年から70年余にかけて「ユダヤ戦争」がエルサレムで起きている。抵抗する多くのユダヤ人が殺され、神殿は炎上し、崩壊した。ただその戦争の中で初期のキリスト教会は、キリストの教えに従い、非武装を掲げ、戦争には加わっていなかった。ユダヤの人々が戦争の道に進むにつれ、戦いを拒否するキリスト教徒たちは、非国民扱いされたことは言うまでもない。資料によると、2世紀の第二次ユダヤ戦争も含めてキリスト教徒が戦争に参加した形跡は見当たらない。忠実にキリストの平和的教えを守り通したということがわかる。

当時のキリスト教会は、ローマ帝国の抑圧の中にあつながら、またユダヤ教からの厳しい攻撃にもさらされ、自分たちの信仰を守り通していたのである。そのような背景がまたヨハネ福音書の中にも映し出されているように思う。6章41節からの箇所は、イエスとユダヤ人たちとの問答になっている。ナザレのイエスを神の子と信仰するユダヤ人・キリスト教会への批判と皮肉がそこに記されている。

この箇所は、ヨハネ福音書の「主の晩餐」とも言われる。「主の晩餐」と言えば、パウロが綴った第一コリントの主の晩餐の言葉を思い出すが、パウロが記す「食べる」というギリシア語は「エスティオー」という語が使われ「食べる、食事をする」と言う普通の意味。ヨハネの記す「食べる」は「トロゴー」という語が使われ、それは「むしゃむしゃ食べる、肉を食らう」という、お上品な食べ方とは、全く正反対な食べ方が記されている。ここをヨハネの「主の晩餐」という時にどのように見えてくるのか？

キリストは、この世に人間の肉体を持って来られ、その肉をむさぼり食うように、虐げ、十字架に磔(はりつけ)にし、殺してしまった。そのことを激しい痛みをもって思い起こしなさいと言う、ヨハネのメッセージではないのかと思う。

神の子をもう二度と十字架に磔にはいけないのであり、むさぼり食うことがあつてはならないと誰もがそう思うだろう。しかし、今なお「命」を、「キリスト」を、むさぼり食う状況が後をたたない。「わたしは命である」とおっしゃったキリストの言葉を常に思い起こしつつ、命が軽視されない世界を祈る。(神谷)